

令和元年度

UR ひと・まち・くらしシンポジウム

2019 年 10 月 16 日／日経ホール

パネルディスカッション

ダンチの未来をデザインする

2019 年度の日本建築学会設計競技は「ダンチを再考する」をテーマに実施され、実在する団地を対象とした再生・活用のための提案が全国から集まりました。

今年の UR シンポジウム（東京）では、同設計競技の全国審査委員長を務めた法政大学教授の渡辺真理氏、そして全国入選を果たした日本大学／大学院と神戸大学大学院の 2 チームをお迎えして、ふたつのコンペ案を通して団地の未来について考えました。

「若い世代が団地をどう捉えるのか？」 渡辺真理氏

今日は私が審査委員長を務めた“ダンチを再考する”という設計競技で入選したふたつの大学のチームに来てもらいました。はじめに私から団地について少しお話をさせていただきます。私たちの研究では首都圏には 1,000 戸以上の大規模団地が 102 カ所あり、その総面積は約 1,610ha で渋谷区よりも大きいことがわかりました。だからこれらの団地に変化が起きると、都市環境に大変良い影響を与えるのではないかと考えています。

以前、私は編集者の植田実さんから「本を読む人と読まない人がいるように、団地に対してノスタルジーを感じる人と、あまり親しみを感ぜない人がいる」と言われたことがあります。また実際に「団地に入ったのははじめてです」と言う学生は多い。こうした“読まず嫌い”な学生たちに、若い世代の考え方を示して欲しいと考えたわけです。では日本大学／大学院と神戸大学大学院にコンペ案を発表してもらいましょう。



渡辺真理氏／法政大学 デザイン工学部 建築学科 教授

2019 年度日本建築学会設計競技 課題：「ダンチを再考する」とは？

日本建築学会の主催により、今年 9 月に公開の最終審査が行われ、日本大学／大学院と神戸大学大学院を含む、全国入選 12 作品が選定されました。課題名を「団地」ではなく「ダンチ」としたことについて、審査委員長の渡辺真理氏は「近年、団地に興味をもつ海外の人々に多く出会う。“sushi”のように“danchi”も世界共通語になる日が来るかもしれない」としてカタカナ表記を採用されたそうです。



パネルディスカッションの様子

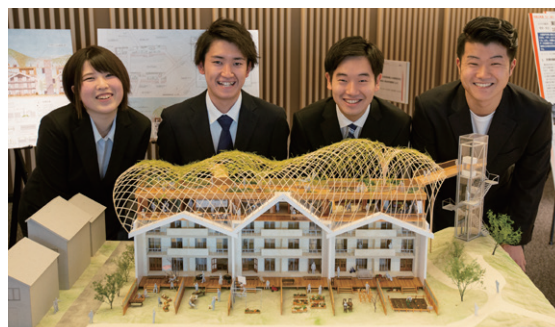
ふたつの大学チームの提案

ソラニワ団地 一住む下町、集う上町ー

日本大学／大学院（高橋 朋・鈴木 俊策・増野 亜美・渡邊 健太郎）

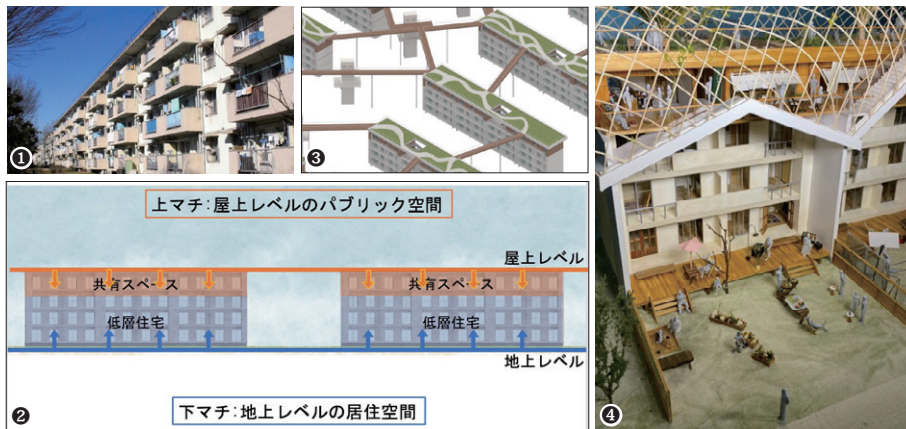
〔計画の対象〕

私たちの計画の対象は千葉県にある常盤平団地です。大変規模の大きな団地ですが、対象に設定したところはエレベータのない、4 階建ての棟が並ぶ「典型的な団地」の区域です。



〔提案の内容〕

この団地に共用スペースを取り込み、住民だけのものから街に住む皆のものへと変えることが、団地再生に繋がると考えました。団地に共用スペースを設けることは、団地が住戸をもつ複合施設となることです。一般的な複合施設は低層部に店舗のような共用スペースを、上層部に住居スペースを配置しています。しかし、住環境として考えると、アクセスや緑の広がりの方から低層部の方が価値が高く、エレベータのない高層階は価値が低くなります。そこで低層部に住居を、最上階の 4 階に託児所やシェアキッチンなどを配置して、この共用部に人が集まるように、屋上を公園のような緑化空間“ソラニワ”としました。緑化した各棟の“ソラニワ”はブリッジで繋いで敷地全体でネットワーク化します。地域の人々が集うこの上層部と良好な住居環境を備えた下層部をそれぞれ“上マチ”“下マチ”と捉え、街の営みを“上マチ”に挿入することで、団地を地域にとって欠かせない場とします。屋上には森のような雰囲気の木製パーゴラを掛け、従来の風景を新たにします。



① 常盤平団地 ② “上町と下町”の概念 ③ 各棟の“ソラニワ”をデッキで繋ぐ ④ 模型写真

団地アソビバ計画 ー消えゆくスターハウスの再生ー

神戸大学大学院（中倉 俊・植田 実香・王 憶）

〔計画の対象〕

兵庫県宝塚市の仁川団地の高台にスターハウスと呼ばれる建物が 8 棟建っています。1950 ～ 60 年代に全国で多く建てられ、現在消えつつあるこのスターハウスを私たちは対象にしました。



〔提案の内容〕

この団地のスターハウス群は近い将来、その姿を消します。私たちは長年、この地域の風景を特徴付けてきたこのスターハウスを残し、街に深く根付く方法を模索しました。完成当時、団地の周囲は緑で囲まれていましたが、現在では広がる宅地の中の緑のオアシスの空間になるという「プライベートとパブリックの反転」が起きています。そこで周辺住民が利用する地域拠点としての機能を各棟に設定し、敷地全体を大きな“アソビバ”とする「住まいから地域の核への転換」を試みました。点在する各棟に対して、それぞれ「ライブラリー」「オフィス」「カフェ」「ギャラリー」などのプログラムを設定し、これらの棟を“遊具的建築”である木造フレームで繋いで敷地を周遊する動線を形成しました。スターハウスはその特殊なプランによって住居としてはデメリットもありました。私たちの計画では各棟の機能に合わせて RC 躯体の減築と木造フレームの増築を行い、公共空間である“アソビバ”として、このプランや距離感をメリットに変える試みを行いました。



① 仁川団地。中央にスターハウスが建つ ② コンセプトの概念図 ③ 全体のアクセシビリティ

パネルディスカッション

パネリスト



法政大学 デザイン工学部
建築学科 教授

渡辺 真理 氏



UR 都市機構
統括役

西周 健一郎 氏



日本大学／大学院

高橋 朋 氏・鈴木 俊策 氏・増野 亜美 氏・

神戸大学大学院

中倉 俊 氏・植田 実香 氏・王 憶伊 氏
渡邊 健太郎 氏

西周 UR では昨年 12 月に『UR 賃貸住宅ストック活用・再生ビジョン』を策定しました。その骨子は 3 つあり、少子高齢化社会や多様なライフスタイルに対応した「多様な世代が安心して住み続けられる環境整備」、地域の価値と魅力を高める「持続可能で活力ある地域・まちづくりの推進」、そして建て替えや既存物件の改修など様々な手法を用いた「賃貸住宅ストックの価値向上」です。登壇いただいた両大学の提案はその着眼点において、このビジョン実現に向けて日々取り組んでいる私共にも大いに参考になるのではと、今日は期待をしております。

既存建物を残しながら、思考を反転させる

渡辺 日本大学／大学院の提案は“住む下町・集う上町”ということで、団地を街として捉えていることが面白いですね。また神戸大学大学院の提案は、敷地周辺の宅地化に伴い、団地の中が公園のような空間になっているというプライベートとパブリックの逆転に着眼して、そこから“遊び場”という提案に繋がったことが面白いと感じました。

西周 神戸大学大学院の提案は、住居としての機能がない点が私共としては少し寂しいですが（笑）、新たに導入する住まい以外の機能に期待されている部分が大きいのだろうと感じました。私共は大家さんとして若い人に住んでいただきたいという気持ちがあるので、団地が学生の皆さんにどう見られているのか大変興味があります。皆さんもフィールドサーベイされたと思いますが、その時に感じたことを教えてください。

神戸大学大学院（中倉） 私たちが仁川団地のスターハウス群に伺った時は、既に区画が囲われて解体を待つ状態でしたので、残念ながら生活の場という雰囲気はありませんでした。これが住まいとしてではなく、周囲の街の人々が集う機能としての提案に繋がりました。

西周 すでにそういう状態だったのですね。日本大学の皆さんはどうでしょうか。常盤平団地はかなり大きな団地ですね。

日本大学／大学院（高橋） 常盤平団地は広大な敷地内に多くの棟が建っていますが、現地に伺ってみて、その 1 棟 1 棟が孤立しているように感じました。その中で棟間が面としてあまり活用されていないことが気になりました。最初は一般的な複合施設のようにこの下層部分に共用空間を入れようと考えましたが、それではこの問題はそのまま残ります。そこで住空間を第一に考えてこれを低層部に配置しつつ、新たに共用空間を上

に配置する構成を導き出しました。**渡辺** 神戸大学大学院は団地の内と外、日本大学／大学院は建物の上と下というように、両大学の提案共に反転させる発想がベースにあります。またこれも共通点ですが、そもそもこの設計競技は「ダンチを再考する」のであり、既存建物を残すことは絶対条件ではありませんでした。特に仁川団地のスターハウスは今まさに取り壊されようとしているので、この場所に全く新しいものを提案することもできましたが、神戸大学大学院はこれを残す案としました。その意図を教えてください。

神戸大学大学院（中倉） スターハウスは線状に配置された一般的な団地ではなく、高台に建つ塔状のとてもシンボリックな佇まいが印象的でした。調べてみると 1959 年に建設されて半世紀以上これが街の風景として親しまれてきたことがわかり、この風景を受け継ぐことが重要だと私たちは思いました。そこでこのシンボリックな形態を残しつつ、かつこの形態に負けない新しい要素を挿入して人々に愛される場にできないかと考えた次第です。

渡辺 一方、日本大学／大学院の皆さんはそのような独特なデザインではなく、いわゆる標準型の団地に向き合ったわけです。その中で既存の建物ありきで考えた意図は何でしょうか。

日本大学／大学院（渡邊） 現状の団地が街と別れているように感じましたので、これを繋げるという発想からです。

渡辺 建物の上部には木造のシェルのようなものが覆うわけですが、この装置にはどのような意図があるのでしょうか。

日本大学／大学院（渡邊） 共用空間を 4 階に配置した時、本

当にそこに人々が集まるのかという疑問がありました。そこで森のような印象を与える面白そうな空間を上にもってくることで、より人が定着する場所になるのではないかと考えました。**西周** 仁川団地もスターハウスは取り壊すので既に囲ってありますが、それ以外の区域は建て替えが進んでいます。そうした中で団地全体からなぜこの場所を選んだのか教えてください。**神戸大学大学院（中倉）** 新しく建て替えが進んでいる場所は UR さんにお任せしようかな、と（笑）。スターハウス群は立地的にもシンボルとしても団地の中心的な存在です。これを団地の中のパブリックな場所にしたらどうかと考えました。先ほどスターハウスに住む人がいないのは寂しいとご指摘いただきましたが、皆で使う場にするからこそ、あえてそこに住む特定の人をつくらず、皆で管理・運営ができれば良いと考えました。**神戸大学大学院（植田）** またここをひとつの大きな公園と捉える中でこのくらいの範囲が適切ではないかというのも理由のひとつです。

団地に住まい以外の要素をどう組み込むか

渡辺 皆さんの案では単なる商業施設ではなく、人々の居場所となるような場所を挿入することを提案しています。西周さんが仁川の方は住居機能がなくて残念だとお話されてましたが、逆に言うとうたつの提案は、団地の中に“住”以外の機能がもっと必要なのではないかという若者の直感なのだろうと思いま



常盤平団地を敷地に設定した日本大学／大学院の「ソラニワ団地 ―住む下町、集う上町―」

す。またそれらが「閉じる」のではなく、デッキなどで繋がり、建物自体も繋がっている。「繋ぐ」というコンセプトは日本大学／大学院と神戸大学大学院の共通点です。またもうひとつ「この場所ならではの」という要素がありつつ、「どこに展開してもある程度成り立つ汎用性がある」ことも共通点として挙げられます。スターハウスは貴重な住棟形式ですから、別の場所でこのような手法を展開して再生する可能性もありますね。

西周 1,000 戸を超えるような大規模団地には計画当初から商店街が整備されていますが、これらは団地を囲む道路ではなく、団地内部に配置されているケースがほとんどです。このため今、団地にアクセスする外部の人が限られています。団地の中に住まい以外の要素を盛り込むことは計画当初から意図していたものの、それが現状必ずしも上手く機能していない実態はあるかもしれません。両大学の提案のように団地に住まい以外の機能を大胆に取り込むことが団地という存在の価値を高めるという感性は非常に理解できました。団地の現状に対して若い価値観で率直に切り込んでいただいたと感謝しております。

渡辺 今日の両校の提案は新しいものを取り入れつつ、一方で団地の風景をできる限り残したいという想いも強く、これは大きなヒントだと感じました。一度全て壊して建て替えることは簡単です。しかし今日の両校の提案は、団地の未来はただ見たこともない建築をデザインすることではなく、今あるものを活かしながら、それに何かを付け加えるところにあると示唆してくれたと思います。本日はありがとうございました。



仁川団地のスターハウス群を敷地に設定した神戸大学大学院の「団地アソビバ計画 ―消えゆくスターハウスの再生―」